

# 雲と子守歌

小川未明

青空文庫



どんなに寒い日でも、健康な若い人たちは、家にじつとして  
 いられず、なんらか楽しみの影を追うて、喜びに胸をふくらませ、  
 往來を歩いていきます。こうした人たちの集まるところは、いつ  
 も笑い声のたえるときがなければ、口笛や、ジャズのひびきな  
 どで、煮えくり返っています。しかし、路一筋町をはなれると、  
 急に空き地が多くなるのが例でした。なかでも病院の建物  
 の内は、この日とかぎらず、いつも寂然としていました。  
 どの病室にも、顔色の悪い患者が、ベッドの上に横た  
 わったり、あるいは、すわったりして、さも怠屈そうに、やが  
 て暮れかかろうとする、窓際の光線を希望なく見つめている

のでした。

「あんた、いい顔かおいろ色いろをしているのね。」

このとき、火ひの気けのない廊下ろうかで、すれちがった一人ひとりの看護婦かんごふが、  
同じく白しろい服ふくを着きた友ともだちに、言葉ことばをおなかけました。

「そう、そんなに赤あかいこと。外そとの冷つめたい風かぜに当あたつてきたからよ。  
」

「町まちへいつてきたの、うらやましいわ。私わたしなんか、昨夜ゆうべから休やすま  
ないんですもの。」

「よくないの？ 困こまったわね。」

「まだ若わかい奥おくさんなのよ。お子こさんが二人ふたりもあるんですって、ほ  
んとうに、お気きの毒どくよ。なおればいいが。」

「あんたも、疲れるでしよう。お大事に。」

そういつて、二人は、たがいににっこり笑つて別れました。病人につききりの看護婦は、手に氷袋をぶらさげていました。

健康の人の住む世界と、病人の住む世界と、もし二つの世界が別であるなら、それを包む空気、気分、色彩が、また異なつてゐるでありましょう。そうすれば、これらの若い献身的な人々は、いったいどちらの世界に住むというべきであらうか。

ここは、病院の一室でありました。そこには、五つになる男の子が、ろつ骨カリエスにて、もう永らく入院していました。その子の看護には、真のお母さんが、あたりました。子供は、

ひま 日増しにつのる 病勢びょうせい のために、手足てあしはやせて、まったくの、  
 ほねほねと皮かわばかりになつて、見るみさえ痛々いたいたしかつたのでした。それ  
 だけでなく、ものにおびえるような目めつきは、日に幾回いくかいとなく、  
 ゲリゾン注射ちゆうしやや、ぶどう糖注射とうちゆうしやや、ときには輸血ゆけつをもし  
 なければならなかつたので、そのたび苦痛くつうを訴うつた、泣き叫なぶ事じ  
 実じつを語るかたのであります。子供こどもの小さな肉にく体たいと可憐かれんな魂たましいは、病びょう  
 菌きんが、内部ないぶから侵蝕しんしよくするのと、これを薬品やくひんで抗争こうそうする、  
 外部がいぶからの刺激しげきとで、ほとんど堪たえきれなかつたのであります。  
 しかしながら、こうした子供こどもの体からだにも、またすこしの間あいだは、平へ  
 静せいなときがありました。それをたとえるなら、一時間じかんに幾十回いくかい  
 となく、貨車かしやや、客車きやくしやが往復おうふくするために、熱ねつを発はつし、烈はげし

く震動する線路でも、ある時間は、きわめてしんとして、冷たく白光りのする鋼鉄の面へ、無心に大空の色を映すといったような具合です。

ちようど、子供の病室の窓から見える、青い空には、きざざんだ色紙をちらしたように、白い雲、赤い雲、紫の雲が、思い思いの姿で、上になり、下になり、遊んでいるのを、子供は、寝ながらながめていました。

「みんなして、鬼ごっこをしているんだね。」と、子供はひとりごとをいいました。すると、空の上で、耳ざとくききつけた、白い雲が、

「坊やも、お仲間におはいりよ。」と、呼びかけました。

「ぼく、足が弱くて、飛べないんだもの。」

「飛べるように、雲にしてあげるから、早くおいでよ。」

「ほんとうに、雲にしてくれるの？」

「いいとも、坊やの好きな、雲にしてあげる。」

「そんなに遠くいけば、お母さんが見えなくなるだろう。」

「どんなに高いところからだつて見えるさ。ここから、よく坊やが見えるのだもの。」と、雲が、やさしくいきました。

さかんに燃えていた、西の海の炎が、いつしか波に洗われて、うすくなつたと思うと、窓から見える空も、暗くなりかけていました。そして、白い雲も、赤い雲も、紫の雲も、どこへかかくれて消えてしまったのです。



「みんな、お家へ帰つちまつた。」と、子供は、さもさびしそうに、つぶやきました。ひとり自分だけが、置き残されたように、頼りなさを感じたのでした。

晩の食事を告げる鐘の音が、廊下の方から、とびらを通して伝わりました。

「たいへん、おとなしかったのね。気分がいいんでしょう。お母さんは、坊やのいいのが、なによりうれしいんですよ。おみかんでもあげましょうか。」と、お母さんがいいました。

子供は、これに対して、すげなく頭をふりました。そして、うつろに開いた目で、電燈の光が、薄く弱々しく漂う、四方を見まわしました。ここには、明るい、清らかな、空の喜びはなく、

すべてが灰色はいいろをして、ほこりがかかっているような気持きもちちがしました。

階下かいかにある、外来患者がいらいかんじやの控え室ひかしつに、かかっている時計とけいの、

鳴る音な おとがしました。風かぜが、吹きはじめたようです。引き窓ひまどのガラ

ス戸どは、いつか閉められました。月つきがなく、星ほしの光ひかりも射ささず、曇くも

ついているとみえ、外そとは暗くらかった。風かぜだけ、低ひくくかすめ、なんに

もぶつかっていく、そうぞうしいうめきがきかれたのであります。

子供こどもは、白壁しろかべの上うえを、戸とのすきまのあたりをじつと見みつめて

いました。このとき、そこから、忍しのび込こむ悪魔あくまがありました。は

じめ灰色はいいろの雲くものようなものはい出でました。よく見みると、その

雲くもの上に、黒くろい着物きものを着きた魔物まものが乗のっています。鋭すどい剣けんを手てに持も

ち、怖ろしい顔をして、だんだん子供の体に近づくのでした。

「痛いよ！ お母さん。」

子供は、逃げるにも逃げられず、もだえながら叫びました。

「お、おう、かわいそうに、また痛み出したのですか。」

いたわる母親の目は、すでに力なく疲れていました。その言

葉にも、たとえ親とはいえ、どうすることもできぬなげきが感じ

られました。しかたなく、いつものごとく、子守歌をうたつて

聞かせるのです。

まだ、この子が、まったく乳飲み子のときから、抱いたり、お

ぶつたり、寝かせるとき、うたった歌であります。子供は、これ

を聞きつつ、うつつの世界から、夢の世界へ、夢の世界から、さ

らに遠い生まれぬ前の世界へとかよつた、ただ一筋のまぶしい、  
かすかな路でありました。

「坊やは、いい子だ、ねんねしな、

泣かんで、いい子だ、ねんねしな。」

子供は、母の胸にしつかり顔をおしつけ、耳をすましていますし  
た。耳というよりか、心をすましていました。そうする間だけ、  
痛みを忘れたのです。さいなまれる魂が、やわらかな、温かい愛  
のしらべに救われて、暗い中、風の吹く、はてしない広野をさま  
よい、林の方へ、知らない町の方へ、また、高い、高い、空の上  
へと、苦しみのない、安らかな場所を探しにいくのでした。そこ  
には、おばけや、悪魔などの、けつしてわからない、ただお母さ

んと自分じぶんだけが知しっている、いいところだと子供こどもは信しんじているの  
でした。

また、母ははおや親おやは、声こえに真まごころ心こころが通つうじて、子こども供どもの苦くつう痛うがやわらげ  
られるものなら、どんなにでもして、うたつてやろうと思おもいまし  
た。そして、安やすらかにすることによつて、奇きせきてき跡せき的てきに、病びようき氣きが  
なおるよう、神かみに念ねんじたのであります。

しかし、いかにやさしい、信しん仰こうぶか深ふかいお母かあさんでも、疲つかれれば、  
しぜんと眠ねむけ氣けを催もよおし、眠ねむることによつて、氣きりよく力ちからを回かいふく復ふくする、  
若わかい、健けん康こうな肉にく体たいの持もち主ぬしたることに変かわりはありませぬ。  
幾いく日にち、幾いく夜よの看かん病びようの疲つかれがで、いいくら我がまん慢まんをしても、し  
きれずに、歌うたの聲こえは、だんだんかすれて、とぎれたのでした。

「お母さん、ほんとうに、うたっておくれよ。」

子供は、母に、真実にうたってくれと訴えるのでした。驚き、

気を取り直した母親は、

「ほんとうに、うたつてあげますとも。知らぬまに眠つて、わる

かったですね。坊やの苦しいのからみれば、お母さんは、どんな

ことでも、我慢しなければなりません。」

母親は、真剣になつて、子守歌をうたいはじめるのでし

た。母の愛から流れ出る、なつかしい、細いしらは、光る絹

糸のように、切れんとして、切れずに、つづくのでした。子供

は、それを頼りに、しんしんたる遠い道を、ただひとり旅をする

のでした。鳥の鳴く、林の中を歩くこともあつたし、たちまち白

い雲くもといっしよに、鬼おにごっこをしていることもありました。そのときは、いつのまにか、自分じぶんは、紅あかい雲くもとなっていたのです。

とつぜん、歌うたがやむと、糸いとがぷつりと切きれて、からだは、真まつくらあななかおこ暗くらな穴あなの中なかへ落おち込こむような気きがしました。そして、ずきずきと痛いたみ出だしました。このとき、どこからともなく悪あく魔まがあらわれて、一しよ所しょけんめいに逃にげようとする自分じぶんを追おいかけるのでした。

「こわいよう！ お母かあさん。」と、子こ供どもは、火ひのつくように、叫さけびました。

「おお、よしよし。」と、母はは親おやは、我わが子こをしつかりと抱だいたのでした。

「お母かあさん、どこかへいってしまっではいやよ。」

「どこへいくもんですか、坊ぼうやとここにいるじやありませんか。」

「お母かあさん、じきだまってしまふのだもの。」

「いいえ、さつきから、うたっているのですよ。」

「よく、うたつてよう。」

母ははは、こんどは、しずかに、ゆつくりと力ちからづよく、うたいはじ

めるのでした。こうしてうたうことによつて、いくらかでも子供こどもの気持ちきもちが休やすまるなら、自分じぶんは、生命いのちのつづくかぎり、どんなに

でもして、うたうであろうとうたつたのでした。考かんがえると、こう

してうたつたことは、今夜こんやだけでなく、この子こが生うまれたときか

ら、いくたびあつたであろう。たとえば、気きむずかしく、どうし

ても眠ねむらなかつたときとか、病びよう気きで、夜よじゆう泣なき明あかしたと



きとか、母として、べつに他につくす手もなければ、おばあさんに、自分がうたつてもらつた記憶をわずかに呼び起こして子守歌をうたい、やっとねかしつけ、すこしでも安らかなれと祈つたのでした。母と子の愛に昔も今も変わりはなかつたのです。

控え室にかかっている時計が、規則正しく、鳴るのが聞こえました。夜はしだいに更けていくのです。そのとき、暗い、寒い、廊下に立つて、子守歌に耳を傾けている、おばあさんがありませんでした。

「私も、せがれを大きくするまでには、いくど泣いたり、笑つたりしたかしのれない。そして、戦争で、出征してからも、便りがなかつたのは、一年や二年でなかつた。実に長い間のことで、

あの<sup>こ</sup>子の<sup>あんび</sup>安否を<sup>きづ</sup>気遣い、そのため、<sup>わたし</sup>私は、やせてしまった。しか  
 し<sup>し</sup>死んだとは<sup>おも</sup>思われず、どこかに<sup>い</sup>生きているものと、<sup>まいにち</sup>毎日かけ  
 ぜんを<sup>そな</sup>供えて、ただ、あの<sup>こ</sup>子が、どうかして<sup>ぶじ</sup>無事に<sup>かえ</sup>帰つてくれる  
 のを<sup>ま</sup>待つていた。その<sup>か</sup>かいもなく、<sup>せんし</sup>戦死の<sup>ほうち</sup>報知があつたときには、  
<sup>わたし</sup>私は、まったく<sup>き</sup>気が<sup>てんとう</sup>転倒してしまった。しかし、いまだに、<sup>し</sup>死  
 んだと<sup>しん</sup>信ずることができず、どこか<sup>みなみ</sup>南の名もない<sup>しま</sup>島にでも<sup>い</sup>生きて  
 いるような<sup>き</sup>気がして、きようまでは<sup>きぼう</sup>かない希望をつないでいるの  
 ではあるが、もし<sup>せ</sup>せがれが、<sup>くさば</sup>草葉の<sup>か</sup>かげに<sup>ねむ</sup>眠るとしたら、<sup>ひとり</sup>一人の  
<sup>はは</sup>母が、<sup>こう</sup>こうして、<sup>はしゅつふ</sup>派出婦となつて、<sup>た</sup>たよりなく、<sup>ひ</sup>日を送るのを、  
 どうして<sup>し</sup>知るであらうか。」

<sup>あわ</sup>哀れな<sup>ろうば</sup>老婆は、<sup>よ</sup>しわの<sup>よ</sup>寄るほおを<sup>なが</sup>流れる、<sup>なみだ</sup>涙を手で<sup>て</sup>ふいていま

した。

重い荷でも積んだトラックが、どこか外の往來のぬかるみに、はまり込んだとみえ、先刻から、けたたましく笛を鳴らして、抜出ようとあせっている。それが、なんで病床に横たわる、患者たちの安静を妨げずにおくことがありましよう。おばあさんは、ついにたまりかねて、足音をたてぬように、階段を下りると、ようすを見に外へ出ていきました。

いつしか、人の気づかぬうちに、天気模様はがらりと変わって、真つ暗な空は、ただ一つの星影だに、目にとまらなかつた。吹きすさぶ風にまじる粉雪が、顔を打ち、もつれた髪に、降りかかりました。

あちらには、どうもう 獰猛な獣の、おお 大きい目のごとく、こうこうとした黄色の燈火が、ぶきみ 無気味な一筋の線せんを夜よるの奥深く描えがいているのです。

よくじつ 翌日の明け方、あ 子供は、こども ついにこの世界せかいから去さりました。雪ゆきは、その道筋みちすじを潔きよめるため、白しろく化粧けしやうして、野原のほらや、森もりまでを清せい浄じようにしました。そして、風かぜは、悲かなしむ母親ははおやに代かわり、くはるかなる国くにへさまよいゆく、みなし子ごのために、かすれがちな声こえで、こもりうた 子守歌をうたつてきかせるのであります。





## 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「新児童文化 第1冊」

1946（昭和21）年8月

※表題は底本では、「雲《くも》と子守歌《こもりうた》」となっています。

※初出時の表題は「雲と子守唄」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waazora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。



# 雲と子守歌

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>